

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



横田雪洞先生著

追分草物語

發行所 安福通信社



特



特100
300

横田雪堂著

追分節物語

大正
8. 10. 1
内交

安福通信社發行



追分節博士

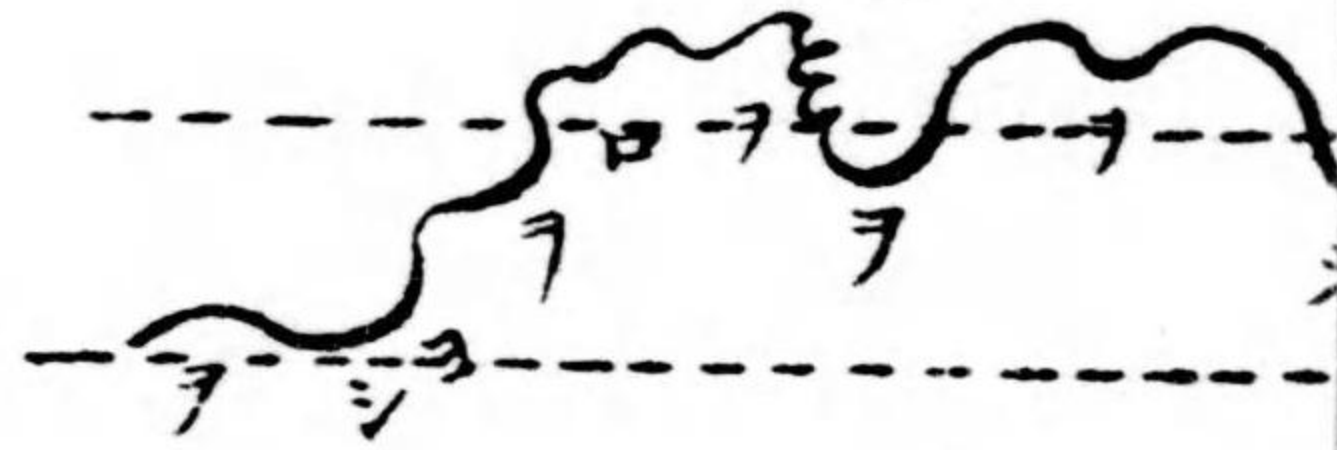


村田彌六翁



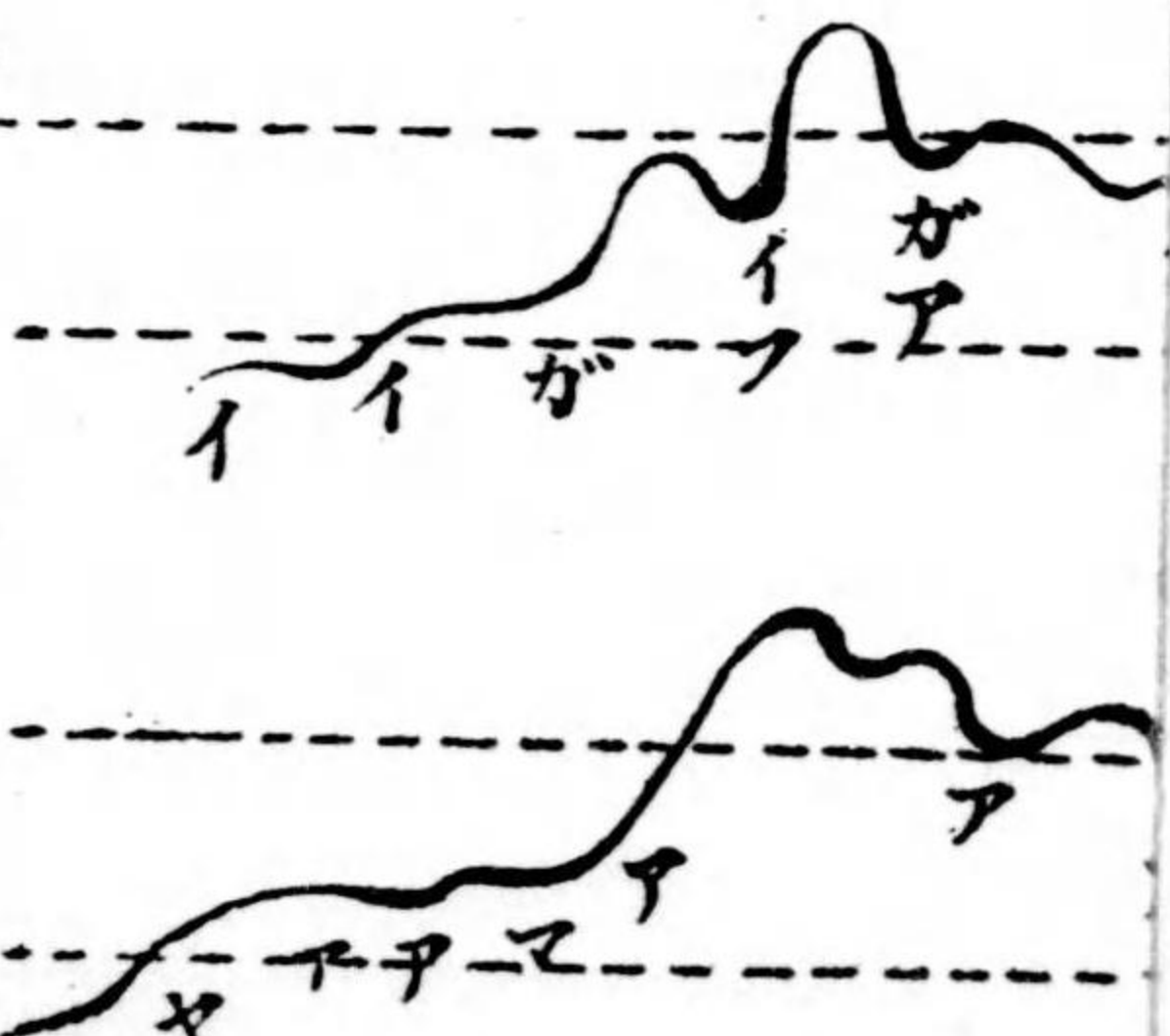
50

浪笑



村

田
シ
打
者
七
七
七



序に代へて

伯爵 小笠原長幹

予は著者横田氏が如何なる士かを知らぬ。而して又追分節の眞味を、不幸にして知らぬ不粹者である。乍然、追分節なるものが、我が國俚謡中の傑出してゐるものであることは知つてゐる。

恰度十年前程前の事である、妻と共に青森に行つたことがあつた。一夜土地の粹士に旗亭に招ぜられ、席上老妓の追分節を聞いた。老妓——名は失念したが——聲太くさわやか、實に妙味あるものであつたと、今でも時折思ひ出す。其後經る事十年、先の日政府委員の一人として、馬匹研究の爲めに一行二十餘名と共に青森に行つた。其折、十年前を思ひ出して其旗亭に、十年前の老妓を尋ねたが、哀れやその老妓は先年不歸の客になつたと云ふ。予は其後追分節を聞かぬ。

惟ふに追分節は、對座して聞くものではなく、希はくは數歩を離れ、霧を通して聞くと云ふ藝術化された語ではなからうか？ 要するに追分節は女性的のものではなく、男性的のものであると思ふ。……(八八二六、伯を訪ねて)……

序言

大正五年三月二十五日、吾輩が蝦夷落の出發前夜、恩師林風氏を神都一志久保の寓に訪ふ。老顔莞爾、慈愛の發露する所訣別の酒杯となるや、氏の戲言は、吾輩北行の使命が、追分節の研究と乗馬の稽古にあるを説いて、呵々大笑す。酔語、酔聽、林風氏當年當夜の快語を記するや否や。

氏や、乗馬術に堪能の人、馬を愛する愛兒の如し。わが外父宮脇氏の馬に於ける、亦、宛如下駄を穿つが如し。一夏、石狩原野の僻村に、父が秘藏の愛馬の嘶くを見て、林風氏當年の酔語を想起す。而も、吾輩が試乗すべく馬の顔は餘りに長く、餘りに恐しきを如何。所謂使命の一は、遂に成功を見ざりし所以なり。

渡道、幌都區立病院前、明倫館階上の一隅にあるや、畏友蕭菴とその居室を隣す。彼が追分節と館主千壽園主人の微吟とは、屢々わが耳にしたりし所。而も、吾輩、性來その技に乏

しく、たゞ鑑賞を好み、黙唱を愛したりしのみ。

蕭菴の追分節は、或は宿房の味噌桶を腐敗せしめたりしならん。然りと雖も、吾輩が追分節に對する趣味は、實に彼の賜なり。

由來、北海道は海の國、鍊の國。追分節は、民衆の口に出づる無心の海國詩也。北地に活躍したる祖先の、素朴なる労働歌也。純なる民謡に抱合されたる直截の情、簡勁の風、婉美の興は、上下抑揚に富む波瀾屈折の旋律と合致して、無限の詩想と獨占的情想とを誘發し無關心なるを許さざるものありき。

偶然は偶然を生む。飄筆より出づるは、果して駒か、鬼か、蛇か。吾輩、偶然の哲理を知悉せずと雖も、感興はこの間に胚胎して、遂にこの一篇の源泉となりし也。林風氏の所謂能の使命は斯くて果されたりと謂ふべきのみ。今にして、氏に語らば何とか云はん。吾輩、恩師の風丰彷彿として浮動し、感慨無量なるものあり。

氏が所謂研究は、音曲の修業を指示したりしや論なし。吾輩、性來、論好きにして念佛嫌ひなれど、自ら愛吟すを欲せず、況んや、死出の三途も論で越す程の咽喉はもちあはせ

ざる也。但し、追分節の語り方は、呼吸を四三に分つが原則なりと聴く。

嘗て、積丹の一角に漂浪したる恩人半菘氏、近く吾輩の鳩居を訪れんとす。思ふに、快談、夏夜の短きを嘆ずるものあらん。當時、その無限の詩才を染めて、神威脚角の繪葉書を寄せたるものは、實に彼なりしなり。

炎熱煤煙の都市に、遂に、彼の地の夏の景觀を追憶し、轉た、羨望に堪へざるものあり。北都の故人、今、健在なりや。

惟ふに、北海道は、吾輩の爲めに因縁淺からぬ地、忘るべからざる憧憬の郷。愛妻東香は實に蝦夷育ちにして、長男禮一郎は大正の純蝦夷ッ兒なり。來八月六日は、彼が誕生第一周年記念日にあたる。

放浪の思ひ出として、滯道三年の記念として、柄にもなき蟲夷趣味の提唱、頼まれもせぬ愚人の愚語、敢て江湖に披瀝す。吾輩、閑人の閑話たるを恥ぢざれば也。

只今、急信來る。その能書により、東都森園天涙氏なるを直覺す。序文の催促也。彼や。嘗て「珊瑚礁」にその才筆を載せて、天下の青年歌人を誘導したるの人。本書の出版、彼が甚

大なる厚意によりしことを特記し、茲に深く感謝す。

四

大正八年七月三十日

扇港夢野にて

雪

洞

追分節物語目次

第一 追分論

- 其一 北海道と追分節……………一
- 其二 追分節の名稱……………四
- 其三 所謂江差追分の起源について……………六
- 其四 追分節の復活、追分節博士村田彌六翁……………八
- 其五 發達史上の二恩人、品川子爵と淺羽代議士……………一一

第二 追分ロマンス

- 其一 追分節、忍路高嶋、神威岬……………一四
- 其二 蝦夷地名と追分節……………一七
- 其三 追分八景……………二一
- 其四 正史と追分節……………三五

其五 拓殖と追分節……………三七

第三 忍路高島ロマンス……………四一

其一 傳説に生れたる趣味的起源説……………四一

其二 御神威の難關と忍路高嶋起源説……………四六

其三 近江商人と忍路高嶋起源説……………五〇

其四 附會的忍路高嶋起源説一二……………五三

其五 松前氏の政策と忍路高嶋起源説……………五五

其六 拓殖悲劇としての忍路高嶋起源説……………六〇

第四 選註追分節文句集……………六二

其一 文句の部……………六二

其二 はやし文句の部……………九六

其三 二上り文句入の部……………九九

第五 新撰諸國追分節文句集……………一〇四

追分節物語

横田雪洞

第一 追分論

其一

北海道と追分節

追分節が、吾が國、俚謠子中に於ける著名のものたるは論莫し。北海道を憶へば、腦裏、吾人を導きて自から追分節を想起せしむ。奥嬢越兒顔如玉、琅々唱出追分曲。人口に膾炙したるこの謠は、

其一 北海道と追分節

蓋し蝦夷趣味の提唱には、必然屈指すべき第一人者なり。
 吾輩、勢力の種々相を観る。統合しては代表の形式を執り、超越
 しては獨占の形式に出づ。花は櫻に、黄門は光圀に、太閤は遂に秀
 吉の専有に了んぬ。而して、北海名産に俚謠子追分節あるは如何。
 由來、發生と大成とは往々時と處とを異にし、その輕重は、識者
 の考慮に待つこと多し。これを人種の上より視るも、或は前者を得
 意とし、或は後者を使命とするあり。吾輩、帝國が大成の國なるを
 確信し、寛宏なる萬有大成の度量に於て、北海の天地、特にこれを
 具有せるを思惟す

北海道は追分節の本場なれど、説者、追分節の發生を北海道に置

くは、吾輩の與せざる所。彼は生粹蝦夷ッ兒に非ず、恰も、印度産の
 釋尊教が、本土を去りて、日本に來り、其處に大成したると異らざ
 る也。

嘗ては一移民なりしも、數代後の今日、北海の舊家たるもの尠
 しとせず。追分節、一度北海の山水に觸れて渾然融和、遂に永遠の
 生命を獲得す。適者生存は臆て適所獨占の意味に外ならず。北海道
 は到底追分節大成の好適地なりし也。

今や追分節は北海道の特産物にして、北海の自然を背景とする時
 眞に生動すと云爾。

其二

追分節の名稱

『此所は何處だと馬子衆に問へば此處は信州中仙道』。吾輩、追分の誕生、命名、その審なるを知らず。暫くこれを信州北佐久郡追分におかんとす。

『西は追分東は關所せめて峠の茶屋までも』。山國の母に生落されし追分は、その原籍地に馬方節の名稱をとどめて、漂泊の旅路を辿り、やがて海洋の父に深甚なる感化を受けて、果然、新生面の開拓を遂げたり。

『歌の節々所で變る知らて咎めて恥搔くな』。勢力ある所、變遷あり、發展の存する所、轉化あり。時と處と人と、之を左右す。その間、伴隨して瞬時も離るべからざるは、それ名稱か、名稱は終始一切の代表たらずんばあらず。

馬子の山歌を象徴する馬方節と、北陸地方に所謂越後追分てふ名あるの外、皆北地に於ける名稱のみ、通慣、江差追分或は松前追分と唱し、別にけんりよ節又は在郷節の名稱あれど、今之を耳にするなし。

吾輩、追分節の名稱は、統一以て北海道追分と稱する乎。然らずんば、單に目して、追分節と稱することの反つて可ならざるかを憶ふ。

其三

所謂江差追分の起原について

謠は調子なり、舞踏なり。田植謠は野人の植うる早苗の調子に起源し、手鞠謠は乙女のつく鞠の調子に胚胎す。峠を越ゆる馬匹の音が化して、馬子謠の音律を醸生したるものならば、舟子の歌ふ舟唄は、渺茫たる海洋の濤の音に音頭を調和させたるものならずんばあらず。

北海道は海の國、漁業の國、萬物海を背景にして始めて躍動す。わが追分節、亦實に北海に高唱する寒潮の音律に負ふ所大なりとす。

江差追分の歴史を語るものは曰く、今を去る百數十年、天明の古、南部より渡道したる座頭佐之一なるものあり。渡島半島の西南、江差の古津に漂泊の旅をとどめて、ふと感に打たれし一事は、北海の寒潮西風に揉まれて、宛然天の奏する樂音の如きものこれ也。妙計即座、彼はこの音律に調和して曲を構へ、旗亭蔦屋の娘、おかめ女に謠はせたるを濫觴とすと。

説者、或は、可憐なる流轉の一女主人公を拉し來りて、座頭佐之一の音樂的靈腕を叙述し、所謂けんりよ節の起原を言へるあり。その眞偽は知らず。たゞわが追分節が波の音に基調を有するの一事は、吾輩、信じて止まんとするもの也。

其四

追分節の復活、追分節博士村田彌六翁

近時、純乎たる江差追分の復活を高唱するもの存す、これ聽て蝦夷趣味の提唱ならずして何ぞ。

追分研究蝦夷歌會なるものは是なり。會員數百名を算す。純粹江差追分の保存を絶叫する一團也。その領袖を翁村田彌六となす。

彼、齡已に七十歳、越後の産なり。明治七八年、職を求めて江差に來り、濱小屋捨金の榮五郎に奉行す。夙に江差追分に趣味を有し明治九年、既に濱小屋の名妓里菊或は片桐まん女について、熱心斯

道を研究す。

彼がまん女の許に通ふ頃『待つ夜の長さ四五尺つめて逢たその夜のばししたい』の一句に二年有餘の歲月を費したりといふは、斯界粹連中の龜鑑となす所なりと聞く。

彼、大正五年四月二十六日稀代の政治家故伊藤公の命日、神戸市大倉山公園なる公の銅像前に追分節を唱ふ。藤公と彼との間に一の因縁談あり。藤公嘗て札幌客中、翁の追分を聞かんとして協はず遂にハルピン原頭の露と消ゆ。翁、遺憾遣る方なく、往年の志を遂げんとて像下に詣りて事これに及ぶ。

翁が斯界の最負役者なるは、天下普ねく人の知悉する所、今日、

追分博士の名を恣にせるもの實に彼が積年の努力の賜なり。知名人士の間、感賞して措かざる又所以なきあたはず。

其五

發達史上の二恩人、品川子爵と淺羽代

議士

名士の間、追分節を熱愛して推賞措かざりしものに、子爵品川彌一あり、彼彌二郎の長男に生る。明治十八年獨逸に留學し、歸朝後農商務省技手に任ぜられ、また奥羽種牧場に在勤す。後、渡道して爾志郡乙部村字千岱野に改進社牧場を興し、江差町に起臥す。

性來、書を能くし、謠曲及能樂は勿論、諸遊藝に通曉せる彼は

其五 發達史上の二恩人、品川子爵と淺羽代議士 —11—

殊に江差追分の情調を愛し、果然粹人を語らひて追分節保存會を組織せり。わが追分節が、一度廢滅せんとして再び勃興の氣運に向へる、實に彼が活動に待つや多しと云ふべし。

一方、朝野の名士に、今の平野源三郎村田彌六など追分節の名家を紹介したるものに、私立北海中學校創設者故淺羽靖あり、追分節隆盛史上、創業者彌一品川子爵と紹介者靖淺羽代議士とは、蓋し逸すべからざる二大恩人ならん。

顧て、吾輩、常に札幌校書界のために痛嘆措く能はざる一事あり、遇々旗亭に登りて號外なるものを見る。追分藝者と名乗るもの二三に過ぎず、拉し來りて歌ふを聞けば、味噌蓋の用意等閑視すべから

ざるもののみ、果して然らばその何藝者なるかを疑ふて、啞然おかめの顔に對陣するの外なし矣。

第二 追分ロマンス

其一

追分節、忍路高島、神威岬

吾輩、既に追分節が北海道の特産なることを言へり。再思すれば人口に膾炙したるかの忍路高島の俚謡は、また以てわが追分節を代表せるの觀あり、説者、追分節の起源を論じて忍路高島の起源と混同したるもの多き、一にこれが爲ならずして何ぞ。

『聲は高島しづかに忍路、しのぶ小樽の中ぢやもの。』

古は想夫戀の切なる情に、消え入るばかりの離別の悲歌、今は四疊

半裡、爪弾の音もいつかと絶えて、陰もなければ姿も見えぬ密會の戀歌、せめてかうして二世三世の苦説ならずんばあらず。

『お女郎高くて及びもないが、せめてお多福鼻曲り。』

蓋し御當人は紅燈の下、窈窕たる美人の膝、意氣軒昂鼻をうごめかして、得意満面の轉吟たるを苦笑せしむ。

不老不死舍主人山田邦彦氏うたひて曰く、およばずの歌のむかしをしのばせて、汽車さへかよふ忍路高島。

吾輩、三たび思惟す、追分節を代表せる忍路高島の俚謡は、お神威あるが爲に始めて生命ありと、お神威に關する俚謡子の豊富なる言をまたざるなり。

お神威は到底怨恨の岬なり、異人種愛奴の可憫なる一女性は、戀の破産より苦悶、絶望、遂に化して怨恨の石神となる、傳説に於てすてに然るを如何。蝦夷地拓殖上、國家千載の遺憾を醸したるを思へば、過去の歴史に於て、吾輩、再びその然るを觀る。三度思を廻らして吾輩自身に及べば、一夏學兄數氏積丹の一角に彌次喜多を演ず、一人不幸、數旬を脚氣病に罹りて呻吟ず、好機遂に逸せられたり、未見のお神威の巖、憧憬のお神威の波、汝が永遠の勇姿と絶の音律とを恨むことや切なり。

わが不老不死舍主人また曰く、小舟さへ通ひえかてし神威岬、人すむ御代となりにけるかな。蓋し感慨古今に往來して無量なり。

其二

蝦夷地名と追分節

客、一度關門海峡を渡りて、廣漠たる蝦夷の曠野を走る長蛇に身を委せんか、車中幾多の興趣涌然として胸裏に浮ばん。しかも必ずや各人をして一樣に奇異の念を懐かしむるものは、驛々に呼ぶ停車場の名稱ならずんばあらず。

北海道の地名は蝦夷の所命を以て原名とす。アイヌの附したるもの凡そ一萬、今尙その大部分を存す。

凡て地名の文字は漢字を假借するもの多し。安政中すてに公定の

議ありしも未だその發表を見ず。明治二年に至り、開拓使判官松浦武四郎上言して、國郡の命名定まり、次いで使廳又村里山川の文字を擬して、公私の用に供ふることゝなれり。

土地の名に底知れぬ親愛と無限の情趣とを味ふは、漂泊の旅路に迎る吾輩の一慰樂也。北地の名稱一の史的回想に耽らしむるものなく。一の文學的興趣を惹起するものなしと雖も、人文未開の異人種が命名に係る奇異の音調は、窓外際涯なき廣漠なる原野の景觀と共に、蓋し大陸文學の零圍氣たらずんばあらず。

故に曰く、蝦夷的情調を味はんとするものは、先づ驛の名にその感興を得よと。

趣味の追分は趣味の地名に生るゝもの多し矣。

『帶も十勝で其儘根室、落石涙は幌泉』。

追分節に於ける代表的傑作なるは周知の事實、その作者が彌一の先考彌二郎品川子爵ならんとは知る人ぞ知る。彼、念佛庵と號し、維新に際し、高杉晋作と結びて革政に功あり、内務大丞、農商務大輔より諸官を経て、特命全權公使、宮中顧問官、御料局長より内務大臣に歴任、明治十七年には勳功に依り特に華族に列せられ、後正二位勳一等に榮進す。

明治十六年、農商務大輔時代、本道視察の砌、函館淺田屋、札幌東京庵等に大々の豪遊を極む。維新の際「宮さんく」のトコトン

ヤレ節を作りし俚謠子爵、當年の意氣益々旺盛なるの觀あり。

『口で夕張こゝろは空知、なぜにまことを岩見澤』。

『宗谷そはずにわかるゝならば、この身は美國となるわいな。』
無理なく、理屈なく、作意自然にして虚飾なし、最も吟誦に叶ふ者か。

『なにを由仁もこゝろは奈井に、輪西や知床清眞布』。

車中徒然、何者の粹漢ぞ、室蘭線の驛名を歌ひて斯くの如し。いづれの紅燈、いづれの緑酒か、彼をのみて酔はしめ、この得意の句をなさしめたる。憾むらくは、側侍の阿嬌が優姿彷彿として消えざるを。呵々。

其三

追分八景

吾輩、日本八景論を起稿せんと志すや、其の北海道に關する資料、亦筐中に堆積す。偶然、思をわが俚謠子追分節にいたして、乃ち追分八景の戲撰成れり。お神威の海關、鷗島の優姿、三本杉の奇巖、夫婦島の遠望、奥尻の紫翠、三津の繁華、港街の夜明、出船の朝霧は即ち是也。

怨のお神威 『うらみあるかよ御神威様よなぜに女の足とめる』。
男曰く、『小樽海路にお神威なくばつれて行きたい蝦夷地まで』。女

曰く、『主はあたちかお名残惜しや女通れぬ關がある』。岬角北西端上、光達十八湮に及ぶ白色不動燈臺は、無聲の巨巖を照し、無心の怒濤を照して、往昔のロマンスも今うたかたの夢と消えたり、吁。

夢の鷗島

『松前江差の鷗の島は根から生えたか浮しまか』。津花

岬前、煙波の中に眉の如く浮びて、あはや沈まんとしてからくも顯はたる優姿。長さ十町、幅二町半に過ぎず、しかも中央部は低頭地を成して宛然二島の觀あり。醉顔朦朧として、濱邊に佇立する時夢か、現か、虚か、實か、その存在を疑はしむるを感ず。

昔時一老婦あり。一夜閑にして、一條の閃光該嶼より至る。覺めて至れば、一老翁の柴を焚くあり。顧みて一小瓶を授け、且つ告

げて曰く、瓶中の水を河中に投ずれば鯨夥しく海濱に群集せん、毎春之れを網して民その業となすべしと、忽焉として消失せぬ。老婦欣怪、歸りて其の言の如くせば、果然蒼海白色を呈して鯨群來る老婦、人に教へて網を投ぜしむるに、一網にして魚船に滿つ、曰く毎春之れに網して民業と爲さば。長く飢餓の患なかるべしと。終りて老婦も亦行く處を知らず。

老婦の海に投ぜし瓶子は化石して、今もこの島の海濱にあり、瓶子石と云ふ。

頼鴨厓流寓してこの地にあるや、諸友と共に江差八景を賦す。中に鷗島煙檣の一絶あり、鷗洲波靜似滿湘、多少舟船繫夕陽、日暮水

●天●秋●一●色●、●淡●煙●薄●霧●罩●連●橋●、●西●川●雍●が●作●な●り●矣●。

三本杉の奇観 『主は瀬棚の三本杉よ、二本はなれてわしやひとり』。

江差に二十五里、壽都に十二里、利別川の恩澤に浴して貨物集散の地たる瀬棚村驛。海中、幾多の巨岩散點す。最も外方に位して、一大磐岩上に屹立するを蠟燭岩といふ。その北東二鏈半、濱を距る約半鏈の波間、高さ百呎乃至百二十七呎の三岩あり。鼎足齊聳して、頭稍尖鋭す、遠望老杉樹の如し。蓋し航海中の一奇観たるを失はざる也。夏季、小汽船は三本杉と蠟燭岩との間に假泊すと、知らず、舟中の人無心にして、今は昔享祿二年の春、夷長多那計支と工藤

祐兼祐致のこの地に干戈を相交へし悲史の戦跡たるを。

大島小島の紫翠 『大島小島の間通る船は、江差うけかよなつか

しや』福山を西に海上七里、日高の三峰を見して小島あり。北西十里、江良町の真西十三里の波上、楢圓形の死火山大島を見る。對馬海流ありて反流し、東向、以て津輕海峽に入る。海潮の間に一葉の帆船を點するあらんか。景觀は忽焉變じて動態と化し、大島動じ、小島走り、物思ふ人の心、亦遠く飛ぶ。

吾輩、たま／＼吐月峰を敲けば、煙のたくりて騰る。苦笑、筆を澁らせて曰く、『男大島女よ小島、やませとりもちや帆がはらむ』、蓋し一粲の價値だにもなし矣。

紫獨の奥尻 『大島小じまは兄弟じまよ何故に奥尻はなれ島』。久遠の西、八里の海上に孤懸す。土人今もイクシリと呼ぶあり、蓋し向島の義か、地勢相叶ふものと云ふべし。

奥尻は松前五百年史胚胎の島嶼とか。その南部に位して初松前の古城跡あり、東西三十間、南北百八十間、山を負ひ、西に面す。相傳ふ、享徳三年八月新羅三郎十七代の後胤、若州小濱の住人武田大膳大夫國信が嫡子、武田彦太郎信廣。從属佐々木俊綱及工藤祐長を率ひて、南部田名部より該嶼に着し、始めて此處に據ると、果して然らば。彼が隆盛の基礎、實に此の處に萌芽すと云ふべし。

奥尻は日本帝國中唯一の禁酒國たりき、明治十六七年の交、頻

年薄漁、大小の民戸、一齊に産を破りて飢餓に迫る。林郡長、一時官米を以てその急を救ひ、人民を戒諭し、先づ馬鈴薯耕作の法を授け、勤儉貯蓄、節酒禁酒の民約を爲さしむ。蓋し當時の飢餓は、久遠、太櫓、瀬棚の諸地皆然りき、獨り奥尻に於てこの成果を發現す、専ら地の利と人の和と相叶ひしものと云ふべし。

奥尻は眞に奇異の國也、俗間曰く、島内蛇と鼠と隔年に出現し而も蛇必ず眇にして一目と云ふに至つては益々出て、益々妙なり。

花の三津 『花の松前紅葉の江差、ひらく函館菊の紋』。

昔時、福山三千、箱館二千、江差千軒の稱あり。松前三个津の榮華を謠ひて餘す所なしと云ふべし。之を札幌、小樽、函館を以て北海

道の三都となす今日と對照する時、吾輩、輕視して過眼視すべからざるあり。

蓋し、松前藩政の時、治廳を福山に置き、富商の輩を強ひて同所に居住せしめ、以て城下の繁榮を計れり。巴港の良港を以てして、壓倒遂に發達の遲延を見たる所以なきにあらざる也。

松前華の原動力は、吾輩その番所にあるを主張す。去來の船舶は悉皆問屋を定めし貨物賣買の牙儻と爲し、出入貨物に税を課し、其他課目亦多し、面役、穀役、帆船役、蝦夷地初航役、後船役、役人足、役錢、穀役米、常燈錢、役丸太、判錢、二分口錢、三分口錢、工匠役、合船役、流木薪役、伐木役、酒役、出油役、旅人入役、越

年役等の如き皆然り。

又曰く、三个津の景氣は利益を壟斷する請負人の居住に起因す。

出稼労働者の群集。旅舎填咽、百貨輻輳、商業活潑、實に、江差の五月は江戸にもない盛況なりしならん。

『江差照るく函館くもる、花の福山花がさく』。

ひとり福山に於て、自然的内地風を見る吾輩は、更にその人爲的内地化を發見せざるべからず。當時の福山は、到底、三个津中の第一人者なりし也。

紅燈の巷 『あや子よければ座敷がもめる、もめる座敷はけんりよ節』。

蓋し、濱小屋の賣女をあや子と云ひ、別に雁子とも言ふなり。
 初春、鍊群の白色を呈して大擧する時、俄然、海濱に打續く漁家
 商家を見る。收穫、海濱に出積する時、漁村賤妓の蝟集して待つあ
 り、わが俚謠子追分節は、實に海上閨裡の孤軍奮闘を象徴するもの
 ならずんばあらず。

中場所能津登の邊、七つらと言ふ賤妓ありき、初春より秋頃まで
 三个津より輸入す。

昔時、夷地金錢の通用少く、貿易一に物質に頼る。鍊は以て勘定
 立に當てられたる也。其法、五十疋を菅にぬき、棹に架けて干たる
 七本を以て一夜巫山の夢を結ばしむ。七連の名目はその名残なり。

熊石、泊川、相沼内、沙原、白尻、尾札部の新鱒、ユウラブの寄
 昆布、シノリの昆布、知内の鼻曲り（老いたる鮭也）木古内の玫瑰、
 福島の馬鈴芋、札苺の石勃率、泉澤の蕪、三谷のこだし（テンキ也）、
 當別のかじか、茂邊地のホチャレ（悪しき鮭）、富川のホツキ、有川
 の地煙草等、其處の産物を以て賤妓の名とするもの、隨所に多し。
 更に、大野の革襪、森の早馬、鷺之木の陣羽織、落部の蒲脚巾、
 又箱館なる内澗の風呂敷、湯殿澤の薦被後家等皆賤妓の又の御名に
 屬す。

吾輩、嘗て腰折るあり、六千萬の人のうちにて圖らずも、あひし
 君故なつかしみ見る。一樹の蔭、一河の流、漂泊の歡樂は果して一

夜の情に終るや否や。

「待つ夜の長さを四五尺つめて、逢ふたその夜でのばしたい。」

はかなき縁なればこそ、愛着の色彩は濃さを加ふ。「板一枚の底は地獄のあの舟よりも、舌の二枚が恐ろしや」。熱き情の炎の中にも。冷き理智の水はたゞよふ也。

「明けの鐘一つかくしてたもとへ入れて宵の五つにしてみたい。」
今宵一夜は緞子の枕、歡樂の一夜あくれば、明日は出舟の波枕てふ悲哀の自覺はありながら、歸りやいつ来るあてもない。好いた殿御も、無慙や、あけの鐘なりやかへさにやならぬを如何せん。

「主の情は丈にも餘る、なぜに厚子が衿たらぬ。」

閨房の契は夢の又夢、時の餘りに衿たらぬを嘆ぜざるを得んや。港口一夜の樂園已に未練、人世遂に未練の足跡たり矣。

□涙の磯 「あね子なくなよ出船の邪魔だ、なくとなかんで三兩のちがい」。女の終始一を思ひ、男は常に二を念ふ。「見送りましよとて濱まで出たが、泣いてさらばが云へなんだ」。戀は到底可憫の女性が藏する全財産なり。然りと雖も、男性たるもの、戀々遣る瀬なき煩惱の胸裏に、一點事業を念ずる餘地を抱く。

「順風吹けとは親方前よ、碇巻く間に風かはせ」。
戀愛と事業との渦巻を超越して、意地に生さん。泣き、悲しみ、果ては笑ひに蘇生せんかな。

男性的丈夫の雄々しき琴線に觸るゝとき、『沖を眺めてほろりと涙空飛ぶ鷗の懐しい』。女性たるもの波間刻々、微に、小に、變じゆく帆影に、豈無限の戀情なからんや。

海の男と陸の女、事業の海と戀愛の陸。俚謠子追分節は、自然と人生とを打つて一團となせり。わが追分八景は、究竟、自然の形勝人生の情事、兩々披握して磅礴たるを觀る可し。

其四

正史と追分節

吾輩、蝦夷地に於て、特に自然と人類との争闘史を觀る。この人間と人間との白兵戦を訪ぬる時、蓋し己巳の役は、先づ屈指すべきものゝ一なりと謂ふに躊躇せず。

地陷没する所、地震を醸し、大波起る所、餘波を伴ふ。三百年の大樹倒れて、豈土砂の飛散するなからんや。果然、中原の大火飛んで、蝦夷地に未曾有の血戦を惹起すること然り。

『紫の紐にからまるあの鷹さへも落つれば蝦夷地の藪にすむ』。

關門海峡に姿を顯したる脱艦數隻、蝦夷地の風雲已に急なるを告ぐ
官賊、接戦格闘する處、松前城落ち、江差の砦拔かれ、脱兵遂に五
稜廓に據る。一日、軍艦及砲臺より連發したる祝砲聲裡に、蝦夷地
はあはれ賊有に歸し了んぬ。

五稜廓畔望江城、流落天涯孤客情、有約明年塵薩賊、滿城春色
調千兵、これ實に當時脱兵の巨魁武揚榎本釜次郎が入蝦夷偶作。蓋
し、追回到堪へざるもの存せり。

其五

拓殖と追分節

吾輩、家族制度が邦國の誇たるを確信し、祖先崇拜は以て皇國の
粹として矜持するに吝ならず。しかも、墳墓の土地と祖先傳來にな
る一簣の土とは、永遠その地に固守せざるべからずとなし、國民
をして徒然、掌大の天地に萎縮せしめつゝあるの感浮ぶを如何せん。
惟ふに、盲目頑固は人智の未開に伴隨す。郷土を離れざるが果
して祖先に對する義務か、祖先の祭祀は必ず郷國の矮屋に營まざる
べからざるか、一朝不運にして家産を失ふて衣食に苦しむも、尙且

郷土に恥をさらして、その土地を去らず、果して是か。吾輩、これを疑はざるべからず。

『松前は昆布で屋根葺く細藻でしめる雨がふる度芳汁が出る。』

開道五十年の今日、なほこの感を懐けるもの少からず、アイヌの住む島、熊の嘯く國、氷雪の境、人間の住むべからざる國土、因習的妄想は未だ内地人の念頭に残り。その罪果して那邊に存するや。吾輩、大に惑はざるを得ざる也。

『來いといひなされや儂や何處迄も、蝦夷や千島の果までも。』

神代の昔より、戀の淵瀬に棹のたつべからざるは言ふを俟たずして明かなり。ひとり祖先を思ふ一種の情感が、家を重んずる民族の熱

愛が、國民特有の進取的氣象と化合して、國家的大發展の活動に出でざる事を、吾輩、切に怪しむもの也。

『蝦夷の厚子は寒さを凌ぐ、來ても見やんせ都人。』

その上、十一州の大守として、拓殖史上の大恩人たる岩村通俊が、拓殖の大指針をわが俚謠子に乗せて、婉轉玉を轉すが如し、彼が面目、實に躍如たりと云ふべし。

由來、北海道を莫迦にして渡道するもの多けれど、その莫迦にして去るものなし。莫迦にして歸るものあるも、戀しくなりて再び來るもの多し。要は、嫌つたものにあらざる也。吾輩、如何なる方面にしても、その食はず嫌なるを最も唾棄す。

筆を擱して見入れば、机上、櫻花の散亂するあり、一點紅失せて、今や北海の満天満地、凡て是緑色の晴衣を装はんとす。妻のもたらしたる新聞を見れば、鍊漁終るの記事眼にとまれり矣。

第三 忍路高嶋ロマンス

其一

傳説に生れたる趣味的起源説

「忍路高嶋及びびもないが、せめて歌棄磯谷まで」。

一聲二聲皆悲涼、二十六字詩に磅礴たる無限の惜情と斷腸の哀史とは、蓋し興味津津々たるものあり。

況んや、其起源が、或は政治史の真相を語り、或は拓殖史の裏面を披握し、或は漁業史の半面を洞察し、或は文明史上に一瞥を拂は

其一 傳説に生れたる趣味的起源説

しむるに於て、更に一層の閃眼を要すべきにあらずや。

吾輩、先づ、趣味の俚謠を飽迄趣味的に徹底せしむることの愉快を憶ふ。わが忍路高島は傳説に生れき。而して、傳説は凡ての起源説に呼吸を與へし造物主なり。

上國の戰塵飛んで到らず、東風占斷す九十年。白河の關以北縱橫一百餘里、陸奥の黄金花咲く大野に盤踞して、其富玉室に超ゆと稱せられたる藤氏四代の榮華、平泉の春もあはれ時ならぬ暗雲に鎖されて、三代の榮耀もとの無に歸せんとす。時しも文治五年、思ひ出多き束稻の大嶽に、名殘惜しき北上の奔流に、哀愁と無念の涙を揮ひながらも、胸には勃々止み難き壯圖を抱いて、眈々たる眼光を

北斗に射たる一人の快傑あり。わが忍路高島起源説は、快傑出現にその出發點をおく。

義經の渡道説は史家に認められざるもよし、日高のアイヌの會長は今なほ義經とアイヌとの關係を信じて疑はず。義經が世界的傑物成吉思汗と同體ならざるもよし、渡黨の訛傳が此の傳説を醸せりとするも差問なし。餘別嶽の北西山波より成る神威岬積丹半島西北の一角は、源廷尉渡滿門出の解纜地として普く世に傳稱す。

茫茫たる大洋のもたらす北風は、蝦夷の山野を自由自在に風靡して止まず。雄圖鬱勃として爲すあるの力量を有するものには、何れの處か征服せてや止むべき。怒濤暗雲の彼方には我を待てる春あ

り。かく思ひて源廷尉が神威の岬角に立ちたるは、彼が蝦夷地征服の果なりき。

彼は凡てを放擲して疾風の如く舟出したり、眞一文字彼岸に急げり。彼は眞に男らしき丈夫なりしなり。然るにこゝに、捨てられても別れともなしといふ女らしき女あり、蝦夷の一會長の女之也。男を追つて神威海角に到れば、晩かりき、呼べども及ばず、哭すれども風徒に吹荒ぶのみ。激浪のまに／＼漂ふ一葉が呪はしさに、彼女は狂して人間を止め、遂に化して石となり了んぬ。挿話の所有主メノコ岩は、依然海波に洗はれて今に存す。

和人之船婦女を載せて此處を過ぐるあらば則ち覆没せん矣。これ

慟哭止む能はざりし果て、最後に遺したる彼の女の言辭なり。以來本洲の船復た婦女を載せて、海角以東忍路高島に入る無しと。和人を戀の對象として勝利を矜りしアイヌの女性は、今や戀の破産の最後の瞬間、和人の美女に對する嫉妬の炎を胸に印して、敗戦を叫びぬ。異人種間の戀と情調と敗殘者の心理とに、豈一掬の涙なからざるを得んや。

以上は畢竟、英雄傳説、化石傳説に忍路高嶋を潤色したる連鎖劇なり。然れども、想像なく、技巧なく、趣味深妙なる俚謠を以て懐しき郷土の賜物なる愛すべく美しき詩と配する時、そのうちに潜める美を賞玩する程、自然にして且美々しきはあらざるべし。

其二

お神威の難關と忍路高島起源説

自然の山水自ら美なる時、之れに神秘的傳説同化して、一段の興趣を増す。傳説の美は山水の美なり。吾輩、傳説のお神威の地理的存在に就いて書くの義務を有す、讀者亦所説の豫備的知識としてこれを納得し居るべき必要あり。

試に地圖を按ぜよ、赤鯉の洞より、尾に及ばんとする處、双方に擴りて、一は繪鞆岬となり、他は神威岬と爲る。恰も那須千島兩火山脈相會ふて、マツカリヌブリより北走、積丹岳をあらはす、これ

を積丹半島と爲す也。岬頂高さ二百七十呎。巨岩屹立、洋中更に雄姿を見す。就中、五百間許を距る海中、高さ十四丈、其狀人の衣冠して拱するが如き儼然たる巨岩あり。夫れより、稍外方にあたりて平低なる一岩存す、メノコ岩と稱す。かゝる亂石碁布の中、僅に五六十間の航路を有するのみ。

無智なる土人の恐怖、自然崇拜なる異人種の信仰、アイヌが直ちに稱して草木一と爲し、尊崇措く能はざりしに何ら不思議はなし、蝦夷も和人も一樣に恐怖を懷きぬ。舟人一度此處を通過するや、屏氣慎黙、藁を結んで小舟を作り、米酒を奠して海に投じ、口呪して樂一遇烏由而詩客體と祈る。巨巖に面を回られては天なり命なりと

ビクつきたる也。

バチエラー氏は、地名考に於て、カムイは元來神に用ふる語なれど、形容詞として用ふる時は、大なる、義しき、威嚴ある、愛らしき恐しき等を意味すと云へり。自然兒のアイヌが捧げたる御神威の名、げにふさはしき極なりと謂ふべきかな。

たよりと頼む夫の北征に、綿々たる想夫戀の切なる情、袂別の涙は、無慘や捨てられし戀の破綻に凝つて石となしメノコの最期の刹那に残せりといふ言葉は、お神威の怒濤、お神威の巨巖に逢着して眞生命の躍動を現す。人智の開發せぬ限、頭腦ある大爲政治家の出現せざる限、何時までも彼女の言葉通りにて経過せしならん。大和民

族の蝦夷地開拓が遅延を見たる所以、係りて此處にありと云ふべし。廷尉は壯圖を乗せて北征したるも、可憫なるメノコは取残されたり、以來お神威は女人禁制と定る。行くも歸るも汽車の旅、二三月頃來りて五月頃に引揚ぐる現今の出稼と事變つて、板一枚で海を相手の危険事業には行くに行かれぬ蝦夷が島、またの逢瀬を契るの外なかりしなる可し。わが忍路高島の起源は女人禁制を中心として種々雑多の背景施され、潤色多出したるに過ぎず。

其三

近江商人と忍路高島起源説

『蝦夷地街道にお神威なくば連れて行きたい天鹽まで。』今も昔も金に變りはなし、一獲千金の利得は誰しも憧憬の的とする處。たゞ當時の漁業成金がいづ如何なる處に成金振を發揮せしか、漁業家の氣前に魅せられし翠帳紅閨の佳人はいづれにあるか、さても斷腸の哀史の最期の濡幕は果していづれの處なりしぞ。

『三十五反の帆をまき上げて蝦夷地離れりや佐渡の島。』他日もし蝦夷地交通史をものする事あらば、吾輩は蝦夷地交通が太平洋より

も日本海の潮流に乗せられたる一事を特筆せざる可からず、また蝦夷地文明史の一節には江戸よりも京都文明の輸入を論及せざるを得ず、風俗史然り、殖民史亦然り。

松前の全盛はその漁業にあるや論莫し。當時漁業界の花形と云へば、そは江州の八幡、大溝、薩摩の人々なりき。はしなくも忍路高島の起源が、近江商人と因縁づけられたるもの、一奇ならずんばあらず。

往時江州に中一と稱せし大漁業家あり。江勝の地は彼が眼中にあるなし、膽太き江州商人の根性はやがて歌棄磯谷より忍路高島一帯の漁場を獨占し、經營年又年、逐年數多の舟人を派して巨額の收獲

其三 近江商人忍路高島起源説

を得。

日本海の千波萬波を越えて遠く蠻域に門出する彼らには、眼前に山積する鍊ちらつさ、囊中の財貨を蒔き散らす位は何でもなし。泊りくゝの歡樂に耽溺の幾日を過し、津々浦々の婦女の歡心を得たること一方ならず。『例へ一夜の縁でも、明日の浦路を聞くにつけ』齒切れよき好いた男との別離は、蓋し大なる苦の種也。『蝦夷や松前やらずの雨は七日七夜も降ればよい。』綿々の情切に忍び得ず、せめて蝦夷の入口迄にてもとの愛着涌く。その戀愛の情が、その惜別の心が、はかない遺瀨ない彼女らの心から出て、遂に忍路高島となれりと謂ふ。

其四

附會的忍路高島起源説

然れども、吾輩は翠帳紅閨のロマンスの場面を以て窓外胡塵吹き荒んで北海の高波打寄する蝦夷が島曲にとることを至當とす。
 由來大和民族の殖民は長年月に亘りて渡島半島の一角に跼踏され夷人を退けてより幾百星霜の間、掌大の天地に蠢動せしのみ。僅に函館江差の地方を日本地と稱して意張る事を知る彼らも、ひとり漁業の味に至りては徹底的に悟り、積丹地方を中場所、その以北宗谷までの地方を上場所と名づけ、一意利得の獲取に汲々たりし也。

『蝦夷地街道にお神威なくば連れてゆきたい場所迄も。』日本地よ

り上場所に出稼する想思の人には是非と頼めど、其處には行くに行か
れぬ關所あり、死にしメノコの嫉妬の關門あり、女人禁制てふ釘附
けある以上詮方なきを如何せん、うらめしきはお神威なるよと、乃
ち純なる戀の情は凝つて歌となれりとの説あり。

蝦夷地漁業史上、當時の役人が多大の權威を有したる事は事實に
して、彼らが物質的に絶大の收入を有したることも疑なし。權威而
して金と拍子そろひしお役人が上場所出張の途次、お情を受けた
る宿屋々々の遊女達は一樣に別れがづらいと泣きの涙で見送れり。

「松前のずつと向ふの蝦夷地とやらは、朝の別れがないさうな」。
ほろりと垂りし情けの涙の凝る所、遂に此歌となれりとの説もあり。

其五

松前氏の政策と忍路高島起源説

此處に注目すべきは、松前氏がお神威の傳説を己が政策の方便と
して女人禁制を勵行したりといふ説也。他説に比較して稍學理的な
ると同時に、拓殖史上逸すべからざる大問題ならずんばあらず。

惟ふに、松前氏は無智にして無自覺なる移住民と異らざりき。朝
に青豌豆成金となりて夕には救濟の悲しき聲をあぐる近時の無教育
漢と些の選ぶ所もなかりし也。彼には方針なし、目的なし、國家永
遠の計なし、眼前にさ迷ひて遠慮なし、惜むべき事なりしかな。

松前氏は拓殖上の悪魔なりき。蝦夷地開發、移民獎勵の抱負は毛頭なく、農耕を輕じて漁業を重じ、運上金の收斂これ事としたり移民嚴禁、越年差止め、彼が政策は到底拓殖上の致命傷と云ふべく、國家發展障害の一大鐵槌に外ならざりし也。折角延びんとしたる若草は松前氏の重石に完全の生育をはぐまれしか、吁。

『うらみあるかよお神威様よなぜに女の足とめる』。女性が殖民の先驅なる事は言辭を要せずして明かなり。然るに移民を嫌惡したる當時の松前氏は徒らに蝦夷地を憧憬の的たらしめて、女人の通行を嚴禁す。せめて歌棄磯谷までと切なる望を洩さしめたる、理まさに然るべきのみ。

當時及びもない忍路高島、漁人の法網をくじりてまで越年したる上場所、最愛の女性に對する執着を犠牲にして遙々遠征したる彼の地の發達、そは文化四年に於ける近藤重藏巡視の記に明確なる回答あり。後に山、左右に岬、船懸り宜き高島運上屋には二千有餘の出稼集ふ、磯邊には二三百の軒續き、沖には數百の小舟漂ふて波間にありと、漁期の繁昌、蓋し想像するに難しとせず。

えなをかき我も神威に手向して、こえずも願ふ蝦夷の海草。文化十二年、積舟の岬角に立ちし幕吏松浦武四郎は、既に禁制解除の聲を洩せり。

六千餘方里に連る自然の寶庫は、三百有餘年に亘りて荒莫無人の

境として放擲されたり、されど時の力と人の力とは遂に開扉せしめずんば止まざりし也。

松前氏の采邑なる後志國十八領は、文化四年三月幕府の函館奉行に隸し、文政四年十二月松前藩に復し、安政二年二月再び函館奉行に隸す。果然、第二期幕政に際し、堀織部正、村垣淡路守は従來の政策に反して大に拓殖獎勵に力む。曰く移民獎勵、曰く婦女移住の解禁、曰く道路の開鑿、曰く宿驛の新設、曰く建網の開禁、曰く農商鑛業の獎勵、曰く寺院の創設、其の施設顯著なるものあり。然りと雖も、無智なる御幣擔ぎの舟子らには舊き殻を破壊する勇氣を缺き、因習は依然撲守されたり。女人同伴の疑惑、安政三年に

至りて始めて解く、函館奉行の屬吏梨本彌五郎、下僚と共に其妻子を携へて岬を通過す矣。彼はゑなをかく代りに、痛快なる哉、銃丸を放ちて通航せり。海波を破りて岩角に響きわたりし一發の銃聲は、蓋し拓殖史上の一エポックを作りしものと云ふべく、果然、森林は變じて懇田となり、漁場は變じて市街となれり。大和民族が雪積的進行曲を奏する一方、アイヌは刻々滅亡のタイムを印するに至れり。

語物節分通

其六

拓殖悲劇としての忍路高島起源説

最後に、拓殖悲劇としてのわが忍路高島起源説を叙して、吾輩はこの篇を結ばんとす。

ほととぎすたしか鳴いたと寢屋の戸あけて、見れば今宵の月ばかり、驚き易く寢醒め勝ちなる孤獨の悲哀を泌々味ひながら、夫戀ふ女は夢現に主の歸來を祈る。幾度か春來り秋を迎へ、待てど暮せど凡て憂の種、狭き小なる彼の女の胸は遂に極度まで痛手を被りぬ其矢先、夫志を抱きて松前に渡れり、たゞそれ丈の風説を耳にせり。
『荒い風にもあてない主をやるか蝦夷地のあら海へ。』可憫なる女

語物節分通

性は何かいとはん、自ら海山越て蝦夷が島に流れ入りぬ。然るに其處には最終の絶望の暗雲ひとり彼女を迎へしのみ、夫進みて蝦夷地に移れりと聞くからに、女人禁制のお神威を越ゆるに由はなかりし也。
『沖を眺めてほろりと涙空飛ぶ鷗のうらめしや。』よる邊なきさの捨小舟思案餘りて彼女は遂に發狂せり。照れど曇れど晴れやらぬ胸中の煩悶を、雨の降る日風の吹く日、松前城下に悲しみ歎きて謠ひ歩きぬ。狂女の悲しむ想夫戀の聲、わが忍路高島の起源なりと。誠、かゝる哀史が時と處とを換へて、わが拓殖史上幾度繰返されし事ならんか。筆を擱して煙草を喫すれば、無聲の聲をさゝやきて何物をか暗示するが如く、縷々として煙りが身邊を圍繞す。晴れず曇れる春の夕暮は静かに、汽車の轟々たる響音遠くかすかになり行く。

第四 選註追分節文句集

其一

文句の部

忍路高島又びもないが、せめて歌棄磯谷まで。

(註)○忍路 後志國忍路郡鹽谷村字忍路。○高島 同國高島郡高島村字高島 舊時運上屋あり、今水産試験場を置く。○歌棄 同國歌棄郡歌棄村、舊歌壽都場所の首里。○磯谷 同國磯谷郡磯谷村舊磯谷場所の運上屋あり。

聲は高島靜かに忍路、忍ぶ小樽の中ぢやもの。

(註)○「忍路高島」の轉脱也。

お女郎高くて及びもないが、せめてお多福鼻曲り。

(註)○同じく「忍路高島」の轉脱也。○鼻曲り

賣女の異名、「追分八景」参照。

怨あるかよ御神威様よ、なぜに女の足とめる。

(註)○「追分八景」「忍路高島ロマンス」参照。

其一 文句の部

主はち立ちかち名残惜しや、女通れぬ關がある。

(註) ○明治前段の俚語也。○明日はち立ちかち名残惜しや、風のまゝなら吹返す。(石川縣鳳至郡粉挽唄)

蝦夷地街道に御神威なくば、つれていきたい場所までも。

(註) ○蝦夷地 民夷の共に地を招くに及び、南部の民地に日本地の稱あり。以て蝦夷地に分てり。○場所 漁場。「忍路高島ロマンス」參照。

蝦夷地街道に御神威なくば、つれていきたい天鹽まで。

(註) ○天鹽 當時上場所の區畫地也。

神威岬は女子は通れぬ、泣いて別れた忍路村。

(註) ○女子 メノコを指すか。「忍路高島ロマンス」參照。

小樽海路に御神威なくば、つれていきたい蝦夷地まで。

(註) ○小樽海路 後志國小樽區。昔時運上屋あり。

紫の紐にからまるあの鷹さへも、あつれば蝦夷地の藪にすむ。

(註)○「正史と追分節」参照。

あれに見ゆるは殿様船よ、葵御紋の帆をかけて。

(註)○あれに見えるが殿御の村よ、煙立つのがなつかしい。(埼玉縣大里郡雜謠)

口で夕張心は空知、なぜにまことを岩見澤。

(註)○鐵道沿線の地理を謠ふ。○夕張 石狩國夕張郡夕張炭山。同名驛あり。○空知同國空知郡一體鐵路に沿ふ。○岩見澤同國空知郡岩見澤町。鐵道分岐乗換驛なり。

なにを由仁と心は奈井に、輪西や知床清真布。

(註)○同じく沿線地理を謠ふ。○由仁 石狩國夕張郡由仁村字由仁。鐵道停車場あり。○奈井 同國空知郡砂川村字奈井。同驛あり。○輪西 膽振國室蘭郡輪西村 同名驛あり。○知床 同國白老郡にある。驛名也。○清真布 石狩國空知郡栗田村の驛を云ふ。

帯も十勝で其儘根室、落石涙は幌泉。

(註)○品川彌二郎作。○十勝 國名。同國同郡大津村に十勝村あり。

り。○根室 國名。同國同郡に同名町あり。○落石 根室國根室郡和田村落石。○幌泉 日高國幌泉郡幌泉村。

宗谷そわずにわかるゝならば、此身は美國となるわいな。

(註)○宗谷 北見國宗谷郡宗谷村。○美國後志國美國郡美國町。

松前江差の鷗の島は、根から生えたか浮島か。

(註)○「追分八景」參照。○島で名所は仙醉島よ、根から生えたか浮島か。(岡山縣小田郡船唄) 鞆の向ふの仙醉島は、地からはえたか浮島か (廣島縣加茂郡船唄) 島で名所はかづさの岩戸、根

からはえたか浮島か。(長崎縣南高來郡雜謠)

大島小島の間通る船は、江差うけかよ懐かしや。

(註)○「追分八景」參照。○「江差通ひか」とも唄ふ。

松前のあがりさがりの馬形の坂で、ほろと泣いたかいつわすりよ。

(註)○送りましょかへ送られましょか、せめて榊形の茶屋までも(仙臺市雜謠) 西が追分東が關所、關所越えれば榊形の茶屋でほろりと泣いたり泣かせたり。(宮城縣本吉郡馬士唄) ○馬形の

坂 渡島國松前郡福山町に、馬形上、馬形中、馬形下あり。

主は瀬棚の三本杉よ、二本離れてわしや一人。

(註)〇「追分八景」参照。

三十五反の帆をまき上げて、蝦夷地離れりや佐渡の島。

(註)〇三十五反の帆を捲き上げて、那賀の港へ走り込む。三十五反の帆をまき上げて、明日は仙臺石の巻。(茨城縣那珂郡磯節)

大島小島は兄弟島よ、何故に奥尻はなれ島。

(註)〇「追分八景」参照。

花の松前紅葉の江差、ひらく函館菊の紋。

(註)〇「追分八景」参照。〇松は唐崎時雨は外山、月の眺めは須磨の浦。(神戸雜謠) 好いた水仙すかれた柳、心石竹氣は紅葉。櫻三月菖蒲は五月、咲いて年とる梅の花。

江差照るく函館くもる、花の福山花が咲く。

(註)〇坂は照るく鈴鹿は曇る、間の土山雨が降る。(本謠) 坂城照るく追分や曇る、花の松代雨が降る。(信州) 外川照る

海驢島曇る。間の長崎雨が降る。(千葉縣海上郡船唄) 秋
 田照る。南部が曇る、くもる南部が花ぐもり。(盛岡市雜謠)
 雨は降る。宮川止まる、負ふた子は泣く日は暮れる。曇る夕
 立つ夕立つ晴れる、晴れる日がさす虹が立つ。(俚謠正調)

源の清き流れのこの旭川、どうか濁さてくらしたい。

(註) ○旭川 石狩國旭川區。○某氏同地に於ける記念の文句。

旭川川瀬に宿どるあの月影は、今も昔にかはりやせぬ。

(註) ○同上記念の唄。

松前のずつと向ふの夜國とやは、朝の別れがないさうな。

(註) ○夜國 北極接近の地、半歳夜なればなり。

松前は昆布で屋根ふく、細布でしめる、雨がふる度だしが出る。

(註) ○昆布 北海道名産也。昆布で屋根葺くと云ふは、彼地海濱
 に昆布を日に乾したるを見て也。○細布、福山地方に産するを
 細目昆布と稱す。○昆布で屋根葺きや細藻でしめる、雨の降る
 度だしが出る(時代知らず)しも 柱 氷の梁や雪のけた、雨の
 棟木につゆのふき草(東京木遣唄)

松前のずつと向ふの磯地が江差、朝の別れが無いさうだ。

(註)○前謠を本唄とす。

行かうか松前蝦夷樺太へ、朝の別れが無いとやら。

(註)○同上

蝦夷の厚子は寒さを凌ぐ、來ても見やんせ都人。

(註)○岩村通俊作。「拓殖と追分節」参照。○厚子 アイヌの常服也。

來いと云ひなされや儂や何處迄も、蝦夷や千島の果までも。

(註)○同謠福岡縣遠賀郡雜謠にあり。

荒い風にもあてない主を、やろふか蝦夷地の荒海へ。

(註)○荒い風にもあてない主を、やるよ蝦夷地の荒海へ。(茨城縣行方郡潮來節)

君が船かへ白神沖に、色の帆かけて戀の風。

(註)○白神沖 渡島國松前郡南角、全道最南端に白神岬あり。

津輕の龍飛岬と相對し、海峽の西門を爲す。その間凡五里、燈臺を設置す。

蝦夷や松前やらずの雨は、七日七夜もふればよい。

(註) ○同謠、新潟縣潮來節。

あや子よければ座敷がもめる、もめる座敷はけんりよ節。

(註) ○あや子 濱小屋の賣女を言ふ。○けんりよ節 追分節也。

明けの烏かありや三ばそう、おきなくと告げ渡る。

(註) ○三ばそう 猿樂の三番叟と三場所とをかけたる也。

主の情は丈も餘る、なぜに厚子が衿たらぬ。

(註) ○厚子 前掲。

今宵ひと夜は緞子の枕、明日は出船の浪枕。

(註) ○同謠 (新潟縣西頸城郡松前ふし) 今宵はこゝで芝まくら、

あすの夜は吉原で女郎の手枕。(千葉縣匝瑳郡麥搗唄) 今夜こゝに寢て明日の晩はどこ、あすは田の中畔枕。(石川縣河北郡雜謠)

あね子泣くなよ出船の邪魔だ、泣くとなかんで三兩ちがひ。

(註)○泣いて呉れるな出船のさきで、さをも槽かいても手につかぬ。

(千葉縣船頭唄)

明けの鐘なりやかいさにやならぬ、かへしやいつくるあてもない。

(註)○「明けの鐘コントなりや」とも謠ふ。

明けの鐘一つかくして袂へいれて、宵の五つにしてみたい。

(註)○宵の五つ 午後八時なり ○逢ふたその夜の明六鐘を、待つにかへたや暮六つに。(小歌惣まくり)

さらばと言ふまにはや森の陰、かすかに見ゆるは菅の笠。

(註)○同謠(新潟縣西頸城郡松前ぶし)

朝咲いてひるにしをる、朝顔さへも、思ひくの色をもつ。

(註)○朝咲いて四つに萎る、朝顔さへも、思ひくの花が咲く。

(新潟縣追分節)

櫓もかいも浪にとられて身は沖船の、どこにとりつくしまもない。

(註)○櫓も擢も波にとられて身は捨小舟、何處へ取付く島もない。

語物節分遣

(新潟縣追分節)

舟を出しやらば夜更にだしやれ、帆影見ゆればなつかしや。

(註)○水木辰之助「近江八景」に、「えい〜帆影見ゆれば」とあり。

アイノ風別れの風だよあきらめさんせ、いつまた逢ふやらあはぬやら。

(註)○やませ風別れの風だよあきらめさんせ、ほがさ見えぬがわしや怨 新潟) やませ風別れの風だよあきらめさんせ、いつまたあふやら會はぬやら。(宮城縣牡鹿郡船唄)

語物節分遣

待夜のながさを四五尺つめて、逢ふた其夜てのばしたい。

順風吹けとは親方前よ、碇巻く間に風かはせ。

(註)○同謠(新潟縣西頸城郡松前ふし)。

戀の道にも追分あれば、こんなまよひはせないもの。

まとまるものならまとめておくれ、誰しも戀路は同じ事。

(註)○西郷公の作。

いろは四十八ある其の中で、三十二字目がなけりやよ。

〔註〕○三十二字目 ふの字あるを言ふ。○いろは四十八ある其の中で、いやのやの字がなけな良。〔石川縣金澤市雜謠〕

舟は千くる萬くる中に、わたしの待つ舟まだ見えぬ。

花も夕暮三の弦切れりや、一も二もない即是空。

〔註〕○御門跡の作。

龍田川無理に渡れば紅葉が散るし、渡らにや聞かれぬ鹿の聲。

〔註〕○高杉晋作の文句。○丘田川無理に渡れば紅葉が散れる、渡らぢやなろまい鹿の聲。(山形市盆踊唄)

二本差したる武士よりも、矢立差したる主がよい。

〔註〕○同謠(静岡縣駿東郡雜謠)○大小差したる旦那さんよりも、似合ふた百姓の殿がよい。

千兩もちより一文なしの、思ふ殿御と添ふてみたい。

〔註〕○同謠(埼玉縣大里郡雜謠)。千兩持ちより一文なしの、惚れ

た男がわしや可愛。(潮來節) 千兩萬兩の金には惚れぬ、お前
 一人に俺や惚れた。(時代知らず) 千兩箱不二の山程積んでも
 いらぬ、私やあなたの氣に迷た。(時代知らず)

思ふて通へば千里も一里、あはずかへればまた千里。

(註) ○惚れて通へば云々。(福岡縣雜謠) ○こなたおもへば千里も

一里、會はずもどれば一里が千里。(山家鳥虫歌)

惚れて通へば千曲の土堤も、左程長いと思やせぬ。

(註) ○同謠(長野縣更級郡馬士唄)。

沖を眺めてほろりと涙、空飛ぶ鷗のなつかしい。

見送りましよとて濱迄出たが、泣いてさらばが云へなんだ。

(註) ○同謠(新潟縣佐渡郡越後甚句)。

白鷺が小首かたげて二の足ふんで、やつれ姿を水鏡。

戀と言ふ字はことばにこゝろ、互に結んだ縁の糸。

(註) ○福澤諭吉作。○君を戀の字分析すれば、心變りか文がない。

(俚謠正調)戀といふ字を分析すれば、糸し糸しと言ふ心。

奥山の瀧にうたるゝあの岩さへも、ほれるともなくふかくなる。

九尺二間にすぎたる物は紅のついたる火吹竹。

(註)○頼山陽作。

濺ぐ朝雨田川の水に、夏をせかれて咲くあやめ。

堀を越えてもあはねばならぬ、雁と見られてうたれても。

(註)○水戸公御前にてある方が唄ひし文句。

見たと言ふのにうたぐり深い、月が泣いたにしてあかう。

裸で寒かろ着てゆかしやんせ、わしが着換の此の小袖。

(註)○同謠(新潟縣西頸城郡松前ふし)○裸體ぢや行かれぬ着て行かしやんせ、せどの木小屋に菰がある。(東京府西多摩郡馬士唄)○襦袍ぢや寒かろ着て行かしやんせ、妾が着がへのこの小袖。○船ぢや寒かろこれ着てお出て私が部屋着の此襦袍。

廣がり易いは油と浮き名、雫程でもこぼされぬ。

(註) ○人に物いや油の雫、落ちて廣がる何處までも。

一時もなかぬ日はなし人こそ知らね、奥山木かげの不如歸。

浪の音さくがいやさしに山家にすめば、またもきこゆる鹿の聲。

(註) ○浪の音さくがいやさしに山家にすめば、またも色かい松風の音。 ○浪の音聞くが厭さに山奥住ひ、又も煩い松の聲。

奥山の鳥もなかずばうたれもせまい、わしも見なけりや迷やせぬ。

昇る朝日のまことに惚れて、笑ひそめたる梅の花。

板一枚の底は地獄のあの船よりも、舌の二枚がおそろしや。

(註) ○舟板一枚恐くはないが、舌の二枚が恐ろしい。(明治前後の都々逸)

手のとどく梅の小枝を折らずにおいて、及ばぬ櫻に苦勞する。

月を枕に朝日を抱いて、圓くおさまる満まるく。

(註)○月を枕に旭を抱いて、寶盡しの夢を見た。

秋が來たかと紅葉にきけば、鹿と相談せにやならぬ。

松の葉越の磯邊の月は、千歳ふるとも變るまゝ。

(註)○古今百首投節。

村雨のはれ間はれまにかいとすれど、またもふりくる涙雨。

末ついに海となるべき山水さへも、しばし木の葉の下くぐる。

(註)○望みある身は谷間の清水、暫し木の葉の下くぐる。(明治前

後都々逸)

二葉の折からもみあげられて、末に互の友白髪。

研ぎあげた米ぢやなけれど仕かけた懸路、まゝにしようとて木をさ

語物節分追

やす。

(註) ○かしぎたての米ぢやなけれど仕かけたからは、まゝにする迄きを燃す。

手には馨を移させおいて、岩に思ひの根を残す。

雪の肌ゆき ばだに氷こほりの刃やいば、露つゆの命いのちの捨てどころ。

(註) ○同謠(秋田縣雜謠)

洗髪あらひかみほど心こころがとけて、主ぬしに誠まことをつげの櫛くし。

年としの瀬せや水みづの流ながれとハテ人ひとの身みは、あした待まちたるる寶船たからぶね。

(註) ○寶井其角たからい きかくと大高子葉おほたかし たふとの句也。

二人手ふたりてに手てを狩場かりばにしのび、思おもひとげたる今日けふの首尾しゆび。

(註) ○曾我兄弟そがきやうだいをよむ。

東風こちよ吹ふくに米こめのなる木きを知らねば教をしゆ、井越いごし早稻せせのわらを見みれ。

杜鵑つとみすずたしかないたと寢屋ねやの戸とあけて見みれば、今宵ことひの月つきばかり。

語物節分追

親おやに孝行かうこう主人しゅじんも大事だいじ、そして私わたしも見捨みすてずに。

何卒なにとぞくなかなはせたまへ、御禮おれい参まゐりは二人ふたりづれ。

島田親切しまだしんせつ丸鬚まるすげよいが、どうやら銀杏いんぎょう返かへや二心ふたごころ。

(註) ○同謠どうぎょう(新潟縣刈羽郡松前にいがたけんかりはぐんまつまへふし)。

聞きいて優やさしく見みて怖こわさうな、咲さいて優やさしい薔薇ばらの花はな。

(註) ○同謠どうぎょう(新潟縣西頸城郡松前にいがたけんにしくぎぎんまつまへふし)。

西にしは追分東おひわけがしは關所せきしよ、關所越せきしよこえれば又關所またせきしよ。

(註) ○西にしは追分東おひわけがしは關所せきしよ、關所越せきしよこゆれば茶屋ちややの町まち。(時代知じだいしらず)

西にしは追分東おひわけがしは關所せきしよ、せめて關所せきしよの茶屋ちややまでも。

其二

はやし文句の部

なすび畑はたけのかぼちやめ、あかくなる迄まで待つて呉くれ。

一足そく四文もんのくつはいて、スタバタするなよ此この畜生ちくしやう。

江差えさしの五月ごがつは江戸えどにも無ない、飲のんだ盃さかづきこちよこせ。

投げればたつよなどんざ着きて、石崎濱中いしざきはまなかふうらぶら、あとから掛取かけとりや
ホーイホーイ。

(註)○石崎濱中 渡島國龜田郡錢龜澤村字石崎也。湯之川温泉ゆのかをんせんの東
方二里ほうにりの海濱かいひんにあり。

ソイ賣うつて鱈買かれかふ馬鹿ばか、五十集いそはは飲のんでくだまきやなほ可愛かあい。

(註)○ソイ 「かさご」科くわに屬ぞくする魚さかな。殊ことに北海道ほくかいだう附近ふきんに多おほし。○五
十集いそは 言海げんかい曰いはく、乾物かんぶつ醃魚えんぎよなど商あきなふ生業なりわいの稱しょう。北海道ほくかいだうにて「さか
な屋やを「いさばや」と言いふ。

來きたか丁ちやうさん待まつていたハイ、御前許ごまへばかりが可愛かあいハイ。

追分節物語

さしげ畑のさや豆こ、一さや走れば皆はしる。

ソイあぶらこかれまがり、百に三枚ハツタバタ。

(註)○あぶらこ 鱒也、「あゆもどき」とも言ふ。○かれ 鱒也、軟鱒類に属す。○まがり鱒の一種、「まこがれひ」也。

其三

二上り文句入の部

追分鳥も通はぬ八丈島へ二上り「やらる、此身はいとはねど、あとに残りし妻や子は、どうして」追分月日を送るやら。

(註)○同謠(東京府追分節)

追分花の敦盛十六才で二上り「たまをり姫をばあとに見て、いそいで行くのは一の谷、ほんに」追分熊谷ふたこゝろ。

追分節物語

其三 二上り文句入の部

追分二年待たんせ三年目は二上リ「眉毛おろして齒を染めて、やゝの一人も出来たなら、早く」追分丸鬚主のそば。

追分雨の降る夜に格子の外に二上リ「傘もさゝずに頬被り、立たせておくのぢやなければども、客に」追分出てゐりや是非も無い。

追分さらばと言ふ間に早や森の陰二上リ「あとを頼むは甚兵衛どの、旅のつかれもなんのその、かすかに」追分見ゆるがすげの笠。

追分松前五郎兵衛は各なき罪で二上リ「一心にかければ太助さん、鯛のさ

かなて物語、大久保「追分さんでは是非も無い。

(註)○松前五郎兵衛 江戸淺草に住し米穀を商ふ。性豪剛廉直、義勇を好み任侠の風あり。幕士に怨まれ、讒に會ふて獄に入るや、一心太助大久保彦左衛門に情を告げて解冤、知行千二百石近習役を命ぜられ、改名松前帶刀と稱し、一子彌一亦小姓と爲り、名を民谷と更む。

追分愚痴を言ひつゝせなかとせなか二上リ「今にも鳥がないたなら、互に別るゝ身ぢやないか、機嫌」追分なほしてねやしやんせ。

追分松前のずつと向ふの岩根の竹は二上リ「元は尺八なかは笛、末はそもじの筆の軸、おもひ」追分まゐらせ候かしく。

第五 新撰諸國追分節文句集

船が着くく〜百二十七艘、様が御座るかあの中に。

出船入船浪行く度に、沖で鷗が立騒ぐ。

船に乗りては櫓權がたより、年が寄りては子がたより。

船は出て行く帆掛けて走る、宿の娘は出て招く。

幼馴染に離れた折は、沖の櫓權が折れたよな。

女好きなら八丈へ行きやれ、八丈昔は女護の島。

岩に堰かれて腹立つ波も、心すぐなら波こさん。

沖の戸中の三本竹は、うまず竹やら子がさかぬ。

佐渡と越後は筋向ひ、船をかけたや船橋を。

語物節分追

京の大佛に帆柱持たせ、鯨釣りたや五島浦で。

千代に八千代に御代治りて、波も静かに四つの海。

来いといふたとて行かれる道か、道は四十四里夜は一夜。

人の娘と新造の船は、人が見たがる乗りたがる。

花の繪島はからみがあれば、手繰寄しよものみのはらへ。

語物節分追

志渡はよい町西北をうけ、八島おろしはそよくと。

わしは濱松ねいろとすれば、磯の小波がゆりおこす。

平戸小瀬戸から船が三艘見ゆる、丸にやの字の帆が見ゆる。

いく夜明石の浦漕ぐ船も、うかれこがれて磯へ寄る。

見れば見わたす棹さしやとどく、なぜにわが戀とどかぬぞ。

波の上でも來らりよなら行こよ、船にや櫓もある櫂もある。

馬方船頭は乞食に劣る、乞食や夜寝て晝稼ぐ。

船が着きます百二十五艘、酒や煙草を積交せて。

船を作りて嵐を待つて、花の清十郎に櫓を押させ。

船の舳に立ちたる女子、遊び女子か船神か。

船のやぐらに小松を植えて、小松おろして船が出る。

川で川舟湊て茶舟、沖で大船帆掛船。

とろりと沖のる船は、女郎が招けば岸に着く。

波浮を朝まきやかすかに見える、遠くなる程なつかしい。

茅ヶ崎沖まで見送りませうか、夫から先なら神だのみ。

語物節分遣

第五 新選諸國追分節文句集

—二一〇—

おまやお立ちかお名残惜しや、雨の十日も降らせたい。

□ 錨をといて帆をまく時は、しんから涙がほろと出る。

□ 日和都合でまくかも知れぬ、涙こぼすな露程も。

□ 東北風吹けとは船頭衆のことよ、西風の十日も吹けばよし。

□ あすはお立ちかこの浦繁昌、永く御世話になりました。

語物節分遣

第五 新選諸國追分節文句集

—二一一—

□ 三浦岬の貝取る船は、貝を取らずに妻をとる。

□ 三浦三崎のどんと突く浪は、五尺男の度胸だめし。

□ 泣いて呉れるなまだ夜は明けぬ、早く返すも人による。

□ 實意明石の島おじやれ、浪に云ひたい事がある。

□ 相模灘をば兩手に拜み、可愛い旦那つ子の乗るうちは。

南風吹かせて江戸船よんで、たより聞いたり聞かせたり。

松は唐崎時雨は外山、月の眺めは須磨の浦。

須磨の浦邊で汐汲むよりも、君の心は汲みにくい。

此處は播州舞子の濱よ、向ふに見ゆるは淡路島。

淡路島から千鳥が通ふ、幾夜寢覺の須磨の關。

新潟戀しや白山様の、松が見えますほのくと。

兎角邪見は風ゆる波も、船に思はぬ氣がねする。

沖の鷗も舞子の濱よ、波の鼓に松の琴。

私や君をば舞子の濱で、何時もあほく松ばかり。

淡路島から吹來る風は、夜毎舞子の松なぶる。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

一一四

嵐荒波寄せては返す、寄せて返して又寄せる。

来いと云うたとして行かれうか佐渡へ、佐渡は四十五里波の上。

朝咲いて四つに萎る、朝顔さへも、思ひくの花が咲く。

鳥ならば近き森にて巢をかけおいて、焦れ啼く聲聞かせたい。

沖を行くなら高帆はよしな、風に情があるものか。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

一一五

旦那大黒上様惠比須、中の子供が御舟魂。

舟のともろへ鶯とめて、明日は大漁と鳴かせたい。

舟は新造でも櫓は新木でも、船頭さんが無けりや走りやせぬ。

泣いて呉れるな出船のさきで、棹も櫓權も手につかぬ。

馬にや惚れねど馬方様が、つけた荷物の程のよさ。

笠を忘れたよ敦賀の茶屋へよ、雨の降るたび思ひ出す。

お前吹く風わしや飛ぶ鳥よ、何處へおちつくあてもない。

箱根八里は腕でも越すが、越すに越されぬ大晦日。

船はちやんころても炭薪や積まぬ、積んだ荷物は米と酒。

磯で名所は大洗様よ、松が見えますほのくと。

大洗で名所は日の出に月見、光かどやくきらくと。

水戸を離れて東へ三里、波の花散る大洗。

沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船。

連れて行くから髪結ひ直せ、世間島田ぢや渡れない。

磯で曲り松湊で雌松、中の祝町男松。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

一一一八

潮來出島の眞菰の中で、あやめ咲くとはしほらしや。

主と別れて松原行けば、松の露やら涙やら。

主のかへりを岸から見れば、舟に帆かけて影もなし。

伊勢の海づらさやかに見えて、清き渚の月の影。

三津の浦曲に夕波高し、萩の上葉に風や吹く。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

一一一九

鳥羽の泉水碓はいらぬ。三味と太鼓で船繋ぐ。

鳥羽の港は入り好て出よて、まとも捲きよてかへりよて、

鳥羽は好いと朝日をうけて、七つさがりに女郎が出る。

伊豆の下田を朝やままけば、晩にや志州の鳥羽港へ。

富士は腰暗伊豆路はくもり、もはや上りが見えさうな。

急げ早や漕げ桑名の船頭、やがて熱田の宮に着く。

馬は物言うた鈴鹿の關で、娘女郎なら乗せよと言うた。

戀しお江戸は未だ見えませぬ、松が見えます岡崎の。

殿の心はお伽良洲浦の、帆かけ船程浮いてゐる。

波切出る時や涙も出たが、山田宮川唄で越す。

さんささしら船おかめ女郎乗せて、村の若衆に棹とらしよ。

船の船頭衆は何してくらす、苦を枕に水の上。

やれ／＼なお前とならば水もない、火もない國のはて迄も。

伊豆の下田に長居はおよし、縞の財布が空になる。

色の黒いを何故氣にしやんす、潜人やめれば白くなる。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

一一二二一

日和やまだく沖風が強い、沖風がはしの西風やこはし。

東風吹けく千百日も、網も錨も朽ちるまで。

碓氷峠の権現様は、私が爲には守り神。

色は思案の帆掛船よ、梶の取り様で深くなる。

私や長良の船頭の娘、船も艀も漕ぐ權も曳く。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

一一二二一

昨夜したけか頭がやめる、二度とせまいぞ手枕を。

出雲崎見りや殿懐かしや、殿の住ましやる宿ぢやもの。

二足四足は身を暖める、利息催促寒氣立つ。

惚れて通へば千曲の土堤も、左程長いと思やせぬ。

急げ馬方早よ漕げ船頭、お伊勢参りは長の旅。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

—一二四—

船も新らし船頭も若し、河は荒川初上り。萬事頼むぞ河の神。

よくも染めたや馬追の浴衣、肩に駈駒裾栗毛。

送りましょかへ送られましょか、せめて榊形の茶屋までも。

蝦夷松前のお方でも、心に二つは無いわいな。

氣仙氣沼烏賊釣り船は、いかも釣らずに女郎を釣る。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

—一二五—

舟の船頭と燕どりは、いつも春來て秋戻る。

拍子に出る舟入る舟、せわしい中にも戀はくせもの。

私の心と沖來る船は、樂に見せても苦が絶えぬ。

かす毛駒追うて六藏は來んか、六藏こそ來れ鈴鹿の坂を。

矢上かき出しや諫早留る、明日は多良越濱止る。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

明日はお立ちかお名残惜しや、風のまゝなら吹返す。

来るか〜と濱へ出て見たら、濱の松風うたばかり。

思ひも戀も笹船に乗せちや、思ひは沈んで戀は浮く。

松に大橋流れよが焼けよが、和田見通ひは船で出る。

境出る時涙で出たが、關の端出りや唄で出る。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

來いと云たとして行かれた道か、道は四十五里波の上。

船頭可愛や音戸の瀬戸で、一丈五尺の櫓がしわる。

可愛い殿御は水鳥灘で、波にゆられて鯛を釣る。

若しや船中で雨など降れば、わしの涙と思ひやれ。

田舎なれども安藝さんは、沖のとなかに嚴島。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七夷子。

高い山から海の底見れば、鯛やたなごや海老くづや。

飲めよ歌へよ今宵が限り、明日は出舟の梶枕。

船で暴風喰うて、紀洲灘漕げば、親は是非ない妻戀し。

船は新造で漕ぎよいけれど、素人造りてあかど入る。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

逢ひはせなんだか遠州灘で、二本ばしらの大和丸。

様が船かや神崎沖に、霞隠れに帆が見ゆる。

見ましよ見せましよ浦戸を開けて、月の名所は桂濱。

一で玄海二で千々輪灘、三で薩摩の黒の瀬戸。

舟は早かれ順風はよかれ、先の仕合はまだよかれ。

語物節分遣

第五 新選諸國追分節文句集

— 一三〇 —

舟よくと夜中の頃に、渡して下され舟子さま。

沖の鷗が友達ならば、文をやるもの我が夫に。

安來出るときや涙で出たが、今ぢや安來の沙汰もいや。

嫁が島根に夕日がさせば、松の小枝を船が行く。

逢うて可愛いや別れがづらい、逢うて別れがなけりやよい。

語物節分遣

第五 新選諸國追分節文句集

— 一三一 —

鳥も通はぬ玄海灘を、何をたよりにたよくと。

笠を片手に皆様さらば、長のお世話になりました。

五里も三里も山坂越えて、逢ひに来たもの歸さりよか。

箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。

坂は照るく鈴鹿は曇る、問の土山雨がふる。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

— 一三二 —

二度と行くまい丹後の宮津、縞の財布か空になる。

惚れてつまらぬ他國の人に、末は烏のなき別れ。

千賀のうら風身にしみぐと、語りあふ夜の友千鳥。

船のともづなとく時は、舟子勇んで真帆あげる。

通ふ千鳥の心も知らず、霞かくした淡路島。

語物節分追

第五 新選諸國追分節文句集

— 一三三 —

女波やさしき小磯の濱へ、じれてぶつかかる仇男波。

沖の大船碇でとめた、止めて止まらぬ色の道。

男伊達なら千ヶ崎沖の、潮の走いのを止めて見よ。

沖の鷗の潮時間へば、儂や立つ鳥波に聞け。

馬がよければ馬方までも、馬が勇めばいそぐと。

舟は帆を巻く帆は真中に、可愛殿御は帆の影に。

駒は名物風吹く度に、ひんと嘶き尾筒振る。

土佐は好い國南を受けて、薩摩嵐がそよくと。

新潟女郎衆は錠か綱か、今朝も出船を三艘止めた。

須磨の浦には今里の子が、吹くや青葉の麥の笛。

千里胡沙吹く風さへ絶えて、淋し馬子唄冬の月。

七里小濱の真砂の數程思へ共、縁が薄いやら添ひもせね。

沖の瀬の瀬の瀬で打つ浪は、可愛い男の度胸試し。

渡り較べて世の中見れば、阿波の鳴戸に波も無し。

舟は千艘入ると萬艘入るとまよよ、唐津定右衛門殿舟はない。

追分節物語

第五 新選諸國追分節文句集

—一三六—

舟を出しやらば夜更に出しやれ、帆かけ見ゆればなつかしや。

走る船をも招けば磯へ、寄るは心の誠なり。

大正八年九月十八日印刷
大正九年九月三十日發行

追分節物語

定價金五拾錢

著者 横田雪堂

發行者 松永敏太郎

印刷者 秋山尙男

東京市麴町區有樂町一丁目四番地

發行所 安福通信社

電話本局五二〇六番
振替東京四〇二〇一

不許複製

發行所

氣のきいた鳥
おもしろい魚

大阪料理

銀座名物 天下茶屋

銀座尾張町二ノ二〇(天賞堂裏通角)
電話新橋二一二番

岡田心理學協會長參加(秘密嚴守、親切迅速、精探日本)

麴町區有樂町一ノ四

心靈應用
高等探偵

安福社探偵部

電本五二〇六番

信用調査、結婚調査、逃走人、雇人及學生監督素行調べ其他

催眠治療術教授

麴町區有樂町一ノ四 (電本五二〇六番)

心理學協會治療研究所

主事 鈴木滋山

□□ 佐藤紅綠先生著

□□ 武田比佐畫伯裝釘 頗る美本約五百頁

第壹回より第百十九回まで

○○家の秘密
報知新聞所載

小説

房

前編

□問題の快著本社より現はる
□言を要せず先づ讀め!!

定價金壹圓五拾錢 送料金八錢

麴町區有樂町一ノ四

發行所

安福社出版部

振替口座東京四〇二〇一番

興味中心の面白い雑誌
警世を旨とする雑誌

松永敏太郎主宰

夢の世界

定価一部三十銭 一ヶ年前納郵税社持参圓六拾銭

麹町區有樂町一ノ四

發行所

安福通信社

電話本局五二〇六番
振替口座東京四〇二〇一

掲ぐる所の記事、一として活文字たらざるはなし。内容を知らんとせば、金貳拾錢分郵券封入申込あれ、直ちに前月號を見本として送本すべし

1871
170

終

